

## 「夜間もやっってる保育園」は現代のセーフティーネット…調査研究本部 榎原智子

2017年11月03日 03時00分

子どもたちが「昼」だけでなく「夜」も安心して過ごせる保育園。その日々を伝えるドキュメンタリー映画「夜間もやっってる保育園」(東京・ポレポレ東中野など全国順次公開中)に、温かい共感の輪が広がっている。親が夜の仕事をされていて、子供に寂しい思いをさせているなどという偏見は今なお根強い、この映画はそうした偏見を払拭し、24時間活動する現代社会が見過ごしてきた“夜の待機児童”の問題を浮かび上がらせている。

### 予想を超えた共感の輪

照明が消えた夜の保育室に幼い寝息が響く。「ゆりかごのうたを カナリアがうたうよ…」とスクリーンから流れる歌詞が胸にしみ入る。映画の冒頭は、東京都新宿区にある24時間の認可保育園「エイビイシイ保育園」が舞台だ。約90人の園児のうち毎日35人ほどが夜10時以降も残る「お泊まり組」。夕食と入浴を済ませ、夜8時には就寝し、寝入った後に親たちがソーツと迎えに来る。

映画が9月末にポレポレ東中野を皮切りに公開されると、「元気をもらえた」「これまで誤解していた」などの反響が次々に寄せられた。中野の小さな映画館は週末には満員で入場できない時も。自主上映の企画も生まれており、全国で上映する劇場は予定を上回る約30か所に増えた。

「認可の夜間保育園があることを知ってもらえた。偏見がなくなれば嬉しい」と喜ぶのはエイビイシイ保育園の片野清美園長だ。片野さんの元へ届く感想には、「高校の教頭をしているが、退職後に夜間保育園をやりたい」といった声もあるという。

片野園長たちを長年応援してきた、映画にも登場した唐沢剛・内閣官房内閣審議官は、「夜間保育園に在るの『寂しい思いの子どもたち』という偏見が長くあった。この映画で、この子どもたちも普通の子どもたちと同じだとわかったのではないかと好意的な反響を分析する。「今や医学生生の3分の1が女性という時代。女性医師も夜間勤務しないと救急医療だって成り立たない。私たちの生活に必要な仕事をしてくれる人たちがいて、その家庭の子育てを支える夜間保育園が必要ということが伝わったのでは」と指摘する。

確かに、エイビイシイ保育園の保護者にはこれまでも、医師や看護師、飲食業関係者のほか国家公務員、マスコミ、自営業、消防士、警察官などの親がいた。一人親家庭の父親が、「この園に入れたら夜勤がある私でも子どもを手元で育てられる。児童養護施設に預けなくて済む」と相談しに来たこともあったという。親族や近隣の助け合いが衰退し、夜間保育園が現代育児の“セーフティーネット”になっていることに、この映画は気付かせてくれる。



映画「夜間もやっってる保育園」より

### 夜間だけでない挑戦

映画化のきっかけは、片野園長が大宮浩一監督に出した手紙だった。実際の保育を知ってもらい、偏見を払拭したいと願っていた園長が、介護福祉現場を描いた大宮監督の映画「ただいま それぞれの居場所」を見て直談判したのだ。夜間保育を知らなかった監督は、8か月かけて北海道から沖縄まで9か所の夜間保育園を回った。「夜間保育園のある社会って、健全なのか」と自問しつつも、親子のために取り組んできた園長らの信念や勢いに「シンパシーを感じた」とインタビューで振り返っている。

夜間に保育する施設には、認可外の「ベビーホテル」と都道府県が認可する「認可夜間保育所」がある。エイビイシイ保育園は34年前に認可外で始まり、2001年に認可を取得した。認可を得れば補助金が認可外の9倍に増え、保護者の払う保育料を3分の1ほどの約2万円に抑えられるため、街頭署名や借金のお願いに奔走して実現したのだ。

その後、都内初の「24時間運営の認可園」となり、有機・無農薬食材を使う「食育」を始め、「夜間も保育する学童」開設と次々に挑戦。今春は、多動など気になる子が増えていたため発達を支援する「療育クラス」を発足させた。親子に必要なと思えば、自力で支援を作り出してきた歩みを知るだけに、夜間保育園への共感が広がる様子が本当に嬉しい。

### 調査研究でもお墨付き

実は、新聞記者をしながら出産した私も、夜間保育が必要な親だった。20年前、地方にいた両親が東京で育児を助けてくれることになり、深夜、寝入った娘を毛布にくるみ、タクシーで自宅へ連れ帰った日々。記者としても母親としても罪悪感を抱えていた当時の切なさが、映画を見て

蘇ってきた。その頃、取材で片野園長と出会って励まされ、「実家に何かあっても、私にはエイビイシイ保育園がある」と勇気もらった。

「夜間で預ける保育が健全か」という指摘は今も聞かれる。「母親が家庭で育児すること」を前提に、男女役割分担や長時間労働が定着してきた日本。ただ、夜間保育園の姿を見てきて、大事なのは「母親が家にいる」こと以上に、子どもにとって愛情を注いでくれる大人との安定した信頼関係が作れるか否かだろうと、今は思う。

筑波大学の安梅勲江教授は、「夜間保育が子どもに悪影響を与えるか、明らかにしてほしい」と夜間保育園の団体から要請され、1998年から全70園を科学的な手法で追跡調査した経験を持つ。園長たちは「もし悪影響が明らかになれば、夜間保育は一切やめる」という覚悟を話していた。安梅教授は、園の観察、親の聞き取り、子どもの育ちなどを一園一園調査した。結果は「感動的だった」という。「夜遅くまで子どもと保護者を支えようとする認可施設は、細やかな配慮で質の高い保育を提供しているとわかった。親の不安やストレスを軽減し、子どもの健全な発育を支える大事な役割を果たしていた」と、安梅教授は高く評価する。

とはいえ、認可の夜間保育園は今も全国でわずか80園ほど。約2500人の子どもが利用する。他方、認可外のベビーホテルは2015年で1579か所。認可外の施設では認可の施設より事故の発生率が格段に高い。認可の夜間保育園は明らかに不足しており、3万人を超えるベビーホテルの利用者は“夜の待機児童”ともいべき存在だろう。

人口減少が進み、女性の活躍推進が“国策”となるなか、24時間働く社会で働く親たちを支える夜間保育園は少子化対策にもなる。「うちの園に通う親は安心して2人目、3人目を産むから、うちには少子化問題はない」と片野園長は話す。しかし、夜間保育もやろうと乗り出す認可保育所は少ない。ベビーホテルが施設や保育士数を改善し、認可施設に移るよう国は働きかけているが、歩みは遅い。膨大な財源が必要となる幼児教育無償化を進める前に、もっと急ぐべき課題は何か、多くの人に映画を見て考えてもらいたい。



榎原 智子 (さかきばら・のりこ) 調査研究本部主任研究員

専門分野: 社会保障、少子化

コメント: 政治部で中央省庁改革や厚生行政を担当後、解説部、生活情報部、社会保障部で社会保障を現場と政策決定の両面から取材。自身の「育児不安」体験を経て、「安心して産み育てられる社会」の実現や「脱・少子化」の方策に関心を寄せてきました。



映画「夜間もやっってる保育園」より